

草津市立矢倉小学校通信 令和3年1月6日 NO.18



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

集中して取り組むよさ、日々の繰り返しのよさ

おめでとうございます。本年もどうぞよろしく申し上げます。

暮れの大掃除。日ごろ手を入れないようなところにも気を配り、気持ちよく新年を迎えたいと気合を入れて臨んだ。窓を開け放って掃除機をかけ、つめたい水にも果敢に挑み、しっかりもみ洗いをくりかえしながら心行くまで取り組んだ大掃除である。ところが年が明け、しばらくはいい気分には浸れたのだが、ふと、なんでもないところにホコリがたまっているのに気がつくと、情けなくなってくる。あのときのあのがんばりはなんだったのだろうか。「やりきった！」と、自分ではそう思っていただけで、いつもどこかがぬけてしまっている自分の正体をまざまざと見せつけられる瞬間だ。新年早々、いやな瞬間である。「大掃除といっても限度があるから仕方ない」「いつもの掃除より、ましにちがいない」などと、言いわけをしている自分に気づくから、余計に滅入ってしまう。

「畑に野菜の苗を植えます。1人で1日に1時間かけて作業をすると1週間かかりますが、2人だと3日で終わります。この考え方でいくと、6人では何日で作業が終わるでしょう。」小学生のとき、この問題に出会った。多人数で取り組めば取り組むほど作業は早く終わることになる、そんな「効率性」というものの見方を身につけてほしいと社会科の時間に取り上げられた問いだったように記憶している。農作業を機械化し、集団で取り組むことのよさを先生は伝えたかったのだろう。ところが、何かにつけてひねくれがちな私は、そのことが素直に受けとめられなかった。確かにある程度は言えるだろうが、せまい田畑に千人も万人もやってきてもどうにもならない、ごちゃごちゃするばかりでうまくいくはずがない…などと納得いかずにいたのである。

その後、大人になり、教員になってからのこと。子どもたちといっしょに廊下のふき掃除をしながら、こんなことを問いかけてみた。「毎日廊下をふきそうじするのと、一度の廊下そうじで同じ回数だけゴシゴシふきそうじするのと、きれいさは同じか違うか」という問いである。「そりゃあ、みんなのパワーでやったほうがきれいになる」「でも、別の日にお客様が来たら、きたない学校だねって言われるよ」言い合いが始まった。しばらくしてみんなが納得した答えはこうだった。「みんなでゴシゴシやって、きれいになったなあど喜ぶのはいっぺんにゴシゴシやった方で、いつもきれいで気持ちよくて、いい感じだねってなるのは毎日の方。どちらも大事。」

その場しのぎと言われようが、しないよりした方がいい。少々抜けていることがあっても、みんなで集中して取り組んだことにはよさがある。これは確かなことだ。その一方で、日々の繰り返しにも意味がある。避けたいのは、日ごろ何もできていなくてだらしく、みんなで取り組んでいても他人任せで抜けているところばかり…。やりがいも感じられなくなること。

それぞれのよさを大切に、その時その時のことを精一杯取り組みたいものだ。

校長 大林道範